

Title	自由とは未来への選択
Author(s)	大木, 英夫
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume20, 2005.3 : 7-14
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3221
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

大木英夫

何年前のことになるが、ノーベル賞作家大江健三郎さんがここに来て講演されたことがある。最近、『新しい人』の方へ』と言う文集を出版された。若い人びとに向けてのメッセージである。『新しい人』になるほかないのです。」「この単純な言葉を書き付けて、皆さんへの呼びかけを結びます。敵意を滅ぼし、和解を達成する『新しい人』になって下さい。大江さんは、この「敵意を滅ぼし、和解を達成する新しい人」という言葉を聖書の中から取った。「皆さんへの呼びかけ」、それはメッセージということである。

「自由」とは何か。今日、人びとは、自由とはスーパーマーケットの棚に並ぶいろいろな商品の一つを選択するよ
うなことだと考える。それは本当の自由ではない。或る大学の学生たちはスーパーフリーというパーティをした。

それが本当の自由ではない。それは警察沙汰になった。彼らは退学になり、一生を台無しにした。「後悔先に立たず」という言葉があるではないか。あとになって悔やむような選択をすることがある。この言葉が示すように、自由とは未来に関わる選択なのだ。『アーゴの法則』に「未来は現在の延長ではない」というのがある。もし未来は現在の延長であるならば、それは山手線に乗ったようなものである。池袋で乗れば、一回りして池袋に戻る。しかし未来は現在の延長ではない、だから未来は選択されねばならない。富士山に行くためには新宿で中央線に乗り換えなければならないようなものだ。未来とは乗り換えるようにして選択すべきものである。自由によって自分の未来の人生を選択する。古い人を脱ぎ捨て、聖書の言う「新しい人」を選択する、そこに真の自由がある。

ウェストポインター チャールズ・ガルス

今日は聖学院の百周年、大学の創立十五周年記念の日である。この日を記念して聖学院の先達チャールズ・ガルストのことを話したい。八号館のガルスト・ホールのガルストである。彼は、北海道大学のクラーク博士、熊本洋学校のキャプテン・ジェーンズよりもっと偉大な存在であると言つて過言ではない。伊藤博文は、「西洋は未だかつてチャールズ・E・ガルストに勝る贈物を送つたことはない」と語つたほどである。聖学院はこの先達をもつてゐることを誇りにすべきである。ガルストの来日は今から一二〇年前、聖学院創立よりも二十年前のことであつた。その記念として彼の伝記 *A West-Pointer in the Land of the Mikado* という本が小貫山先生によつて翻訳された。この人は、伊藤博文が言うような大きな貢献をしたが、何よりも聖学院に残したのは、その生き方である。「敵意を滅ぼし、和解を達成する新しい人」となるという人生の未来への選択を典型的に示したことである。

「ウエストポインター」とは、アメリカの栄光を担うアメリカ陸軍のエリートたちの代名詞である。南北戦争のグラント、第二次大戦の英雄アイゼンハワーやマッカーサーもウエストポインターであった。ガルストは医者の子として生まれた。それはアメリカの南北戦争の時代であった。ガルストは優秀な若者としてアイオワ州知事の推薦を受けウエストポインターに入学した。栄光への道を踏み出した。キャプテンつまり大尉になった。彼は部下を率いてインディアンとの戦いの前線にあった。そのときガルストは現在と未来との間の選択に直面するのである。

イザヤ書に「剣をうちかえて鋤とする」という預言の言葉がある。彼はウエストポインターの誇り高きシンボルであるサーベルを捨てる決断をした。剣は戦争のシンボル、剣は人を殺す武器である。戦争を過去とし、未来の平和の伝道者を選択した。

少年時代のトラウマ

どうしてそのようなことが起こったのか。彼の伝記には少年時代の、今日の言葉で言えば「トラウマ」(心の傷)のような経験があった。ガルストは少年時代短気であったという。兄弟けんかをした、燃えるような怒りのやり場がなく、外にかけ出して畑の中につつ伏した、

もう兄と一緒に住むのもいやだと思った。そのとき突然、どこからかわいがっていつも餌をやっている鶏が来て、ガルストの足をつついた。そのとき、ガルストは溢れる怒りをこの罪のない鶏に注ぎ出し、首をひねって殺してしまった。八つ当たりをした。なんということをしたのか、少年の心から突然怒りの火が消えた。アイオワの大草原に立ち上がった。死んだ鶏をぶら下げて悄然と歩き出した。向こうから兄は、行方不明になった弟を探しにき

た。和解があった。心の癒しがあった。しかしこのトラウマ、心の傷が、彼の心を敏感にしたのではないか。

ガルストの選択

大人になっても少年時代の心の傷は疼く。そのときメッセージを聞いた。メッセージとは元来キリスト教的な言葉である。福音とは「悦ばしいメッセージ」という意味である。福音を聞いた。先に未来への選択は山手線から中央線に乗り換えるようなものだと言ったが、新宿駅にはその乗換えを促すメッセージのアナウンスが響く、立ち上がる、そして乗り換える、そのようにして彼は変わった。鶏は和解のいけにえであったのではないか。そしてイエス・キリストの十字架の犠牲ということがわかったのではないか。人類は、イエス・キリストに八つ当たりして殺したのではないか、そして人類は目覚める、悲しいことだがそれしかない、それ以外に新しい人になることはできない。預言者イザヤは、キリストのことを「悲しみの人にして悩みを知れり」と言った。さらに「その打たれし傷によりていやさる」と語った。キリストのメッセージを聞いて心が動いた、剣を捨てた、そして「敵意を滅ぼし、和解を達成する新しい人」へと大きく変わって行く。ガルストは、三十歳から四十五歳までの十五年、彼の人生の最良の時を日本のために捧げ尽くした。最後に *My Life Is My Message* という言葉を残して死んだ。彼の人生がそのメッセージと化した。

ガルストの心の中に動きが起った。それは外面の動きに換算すれば、太平洋を越えるほどの大きな動きであった。日本もはるか東北の秋田、それから山形へと向かった。山形は庄内地方、「おしん」という外国にも有名になったテレビドラマがあるが（いまイラクでも放映されているそうだ）、まさにその「おしん」の故郷に彼は立ったので

ある。明治時代後期のことであった。ガルストは、そこにあった小作農民の貧困と悲慘がどこから来るかを見抜いた。その地方には日本一の大地主本間家があつた。「本間様には及びもないが、せめてなりたや殿様に」という台詞があつたほどである。殿様以上の大地主がそこに居た。そこにある問題は、キリスト教的に目が開かれなければ見えない。ガルストは「土地は神のものだ」という聖書の教えをもつて、その現実を見た。そして神を知らないことがいかなる社会不正義を産み出すかを見た。ガルストは、地主から税金をとる以外にないと考えた。それが彼の「単税経済学」である。内面の自由から出発して、経済的自由を日本に与え、日本を神の国にしようとした。彼は福音伝道と社会改革とを結び付けた。日本の社会運動の先駆者となつた。青山墓地に彼の墓がある。その動きは直線的、彼はアメリカに戻らなかつた。

もうひとりのウエストポインター

しかし、明治末期に彼の理想は達成されなかつた。日本は、富国強兵の道を戦争へとまっしぐら進んだ。不思議にもガルストの理想は、敗戦後もうひとりのウエストポインター、ジェネラル・マッカーサーの農地改革によって達成された。マッカーサーがウエストポイントに入つたのはガルストの死んだ年であつた。マッカーサーは日本に大きな変化をもたらした。新しい憲法が制定された。日本の国家目標は「富国強兵」から「富国平和」「富国福祉」へと変わった。

日本の内面の問題

日本は、国民としてトラウマをもっている国である。富国強兵策そして侵略戦争の悲惨な結果が、深いトラウマとなつて日本人の心に残つた。しかも今なおその傷は癒されていないのである。マッカーサーの改革は、所詮外面的変化でしかなかった。しかし彼は、日本の内面の問題を見抜いてはいた。彼は言つた有名な言葉がある。「イギリスやアメリカが四十五歳ならば日本は十二歳だ」。これは精神の年齢を言つた言葉である。未熟な十二歳の少年に自由を与える、それは少年犯罪となるのは当然ではないか。大学生ではスーパーフリーのたぐいの自由になる。戦後与えられた自由は腐り出している。日本の癒されない傷は腐り出している。最近長崎の十二歳の少年犯罪に日本中が驚かされた。長崎ではそれを第二の原爆と言っている。あの十二歳の犯罪において今日の日本社会は自由の腐敗の腐臭を嗅いでいるのである。

財界人は最近よく、先に紹介した「未来は現在の延長ではない」という言葉を発する。現在の延長は現在にもどるだけだ。山手線のような環状線では過去・現在・未来が結び付いているからである。もう一度考えて見なければならぬ。ひとが富士山へ行く目的をもつならば、山手線から中央線に乗り換えなければならない。未来への直線コースへ乗り換えなければならない。もし歯が痛いなら、日常生活の繰り返しから歯医者に急いで行くという直線コースに向かわなければならない。日本は、個人としても国家としても、この病める現在から癒しの未来への直線コースに乗り換えなければならないのである。戦後与えられた自由はこの日本の未来を選択するためではないか。新宿駅には乗換えを促すアナウンスが響いている。山手線で眠っている人は目をさまし、乗り換えるために立ち上

がらねばならないのではないか。

新しい人、新しい大学へ

憲法制定の十一月三日の前に十月三十一日宗教改革記念日がある、この順序は偶然ではない。憲法の外面的自由
に宗教改革の内的自由が先行せねばならない。なぜ聖学院大学は宗教改革記念日を創立記念日としたか。聖学院
の存在はメッセージなのである。アメリカのジャズバンドで有名になった若い日本人バンドマンの言葉を聴いた。
単なる音を出すテクニクではない、メッセージをもつことだ、と言った。テクニクだけの大学がある、しかし
聖学院大学にはガルストの *My Life Is My Message* というメッセージが音を立てている。聖学院大学の存在が日本
へのメッセージと化さねばならない。聖学院大学は、そこで古い人のトラウマは癒され、新しい人への動き出しが
起こる、「敵意を滅ぼし、和解を達成する新しい人」が新しい日本をつくり出すのである。

しかし、ひとつ大江さんに賛成できないことがある。大江さんは、「新しい人になるほかないのです」と若い人び
とに訴えながら、もう自分は「もう老人の年齢まで生きて、古い人だ、新しい人になれなかった」と言う。いや、
それは間違いではないか。キリストは、老学者ニコデモにも新しい人になれることを語った。歳をとつても人間に
は自由があるからだ。だから新しい人になることができるのだ。何回、何十回山手線をぐるぐるまわつても、かな
らず新宿が来る、そこで乗換えのメッセージが響く。聖学院大学は、その新宿駅のような乗換えが起こる場所なの
だ。聖学院で立ち上がれ、そして乗換えよ。未来は現在の延長ではない！ オリンピック野球の監督となつた長嶋
茂雄氏は、驚いたのだが、選ばれた選手団を「伝道者」になれと訴えた。いや諸君こそそのメッセージの「伝道者」

となるのだ。ガルスト的生き方を継承せよ。諸君への人生が日本へのメッセージとなる。

本館の壁にギリシャ語文字で書いてある「真理はあなたがたを自由にする」という言葉、聖学院大学の追及する真理は、この自由をもたらす。聖学院大学はその自由の大学である。

自由とは自分が動かずあれこれ商品を選択するようなことではないとはじめに言った。自分自身を動かすこと、自分の未来、日本の未来を選択することだ。聖学院から未来へ、聖学院大学は新しいミレニアムのための新しい大学である。だからこの日われわれは、大学のミレニアム希望の讃歌を高らかに歌って、ガルスト到来から一二〇年、聖学院一〇〇年、聖学院大学十五周年を記念したい。神が聖学院大学を祝福してくださいように。アーメン。

(二〇〇三年十月三十一日オール聖学院一〇〇周年・聖学院大学創立十五周年記念講演会)